

■講演2「ろう高校生のための情報保障

—欲しい未来がなければ、自分で創る—

BBED

NPO 法人バイリンガル・バイカルチュラル教育センター

玉田さとみ

○自己紹介&BBED 紹介

- ▶ 4人家族。二男がろう児（現在、大学4年生）。本業は放送作家。
- ▶ NPO 法人バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター（略称 BBED）ろう青年が立ち上げたフリースクール「龍の子学園」（1999）を運営するため保護者が作った NPO 法人（2003）。
- ▶ 2008 年に、構造改革特区を使って「ろう児を日本手話と書記日本語で教育する」私立ろう学校「明晴学園」を設立（品川区）。

○ろう教育の歩み

- ▶ 日本のろう学校では、昭和8年から手話を禁止。（鳩山文部大臣の訓告）「聴能訓練、発音訓練、読口訓練」を基本に、聞こえる子に近づける聴覚口話法を行ってきた。
- ▶ 手話を使う子どもの手を叩いたり縛るなどして手話を徹底排除。理由は『手話を使うと日本語ができなくなる』というものだった。
- ▶ 二男が都立ろう学校の幼稚部時代も、その価値観は同じだった。

○手話は2つ

- ▶ 保護者らの働きかけで、ろう学校でも一部手話を使ようになったが、その手話は、ろう者の手話ではない。
- ▶ 手話には、日本手話と日本語対应手話がある。
日本手話は、ろう者の間で生まれた自然言語で日本語とは文法構造が異なる独自の言語。
日本語対应手話は、声を出しながら日本語を手や指で表わすもの。
（聞こえない子どもたちには、大変わかりにくい）

○明晴学園誕生

ろう者と保護者による8年間の活動の末、多くの人々の支援を受けて、2008年に学校法人と幼・小の私立学校を設立。（2010年に中学部設立）明晴学園の教員の半分はろう者。半分は手話ができる聴者。

子どもたちは、日本手話を学び、日本手話で全ての授業を受ける。
もちろん、書記日本語（読み書き）や書記英語（読み書き）も学ぶ。

○多様な進路

中学卒業後は、ろう学校高等部、普通高校、海外留学、通信高校などに進学。
しかし、普通高校には、ろう生徒への情報を支援する体制がない。
小中学校には、特別支援学級や通級という公的支援があり、
大学には、障害学生の人数に応じた補助金が入る。（使い方に問題もあるが）
その中間の高校だけ公的支援がない。

○高校生の情報支援

- ▶ 当初、大学で行われている遠隔モバイル情報支援が利用できると考えた。
しかし、大学と高校の条件がまったく異なることが判明。
BBED では、高校生に特化した情報支援をめざした。（2010年10月～）
- ▶ 高校と大学の比較。高校生への情報支援の条件を整理。
- ▶ 以下、同時進行
 - ①文字通訳者の養成と遠隔パソコン文字通訳の実践検証
文字通訳者養成講座を開催（2011）
 - ②筑波技術大学の三好茂樹教授に相談。教授が開発中の T-TACCaption の改良を受け、高校生に合った情報支援をめざした。
2013年4月から都立高校、私立高校の2校で試験的に遠隔文字通訳開始。
 - ③自動音声認識を開発している担当者と懇談
高校の授業に適した情報支援の共同開発を探る
NTT ドコモ「はなして翻訳」（2013） デモンストレーション
NTT「こえみる」（2014） デモンストレーション
フェアリーデバイセズ社（2014） ヒアリング
shamrock records inc「UD トーク」（2015） 開発者講演&実践会
プラスヴォイス「UD トーク」（2016） デモンストレーション
 - ④高校生への情報支援モデルの構築と継続のための活動と実証研究
 - ・平成26年度 障害のある児童生徒の学習上の支援機器等教材開発に応募
→不採用。※採用は NTT「こえみる」
 - ・国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の社会実装支援事業に応募
→採用（2015.10～2018.9） 実証研究
 - ・放送大学大学院で修士論文 「スマートフォンを用いた遠隔パソコン文字通訳システムの評価と今後について」

○遠隔パソコン文字通訳システムの紹介

- ▶ これまでの実績と当事者（ろうの高校生、保護者、高校）の希望をもとに、東京都と契約。（2018.10～現在）
- ▶ 専用 HP（国立情報学研究所が開発している net-commons を使用）
- ▶ ログの提供（利用者の立場に立つことが重要） 守秘義務
- ▶ プロモーション動画（遠隔パソコン文字通訳を見える化して広報に）
- ▶ 利用者（高校生）の動画メッセージ（必要性を見える化して広報に）

○まとめ

- ▶ 情報保障は誰のためにあるのか？当事者の希望が最優先であるべき。
全文か要約か。文字通訳か手話通訳か。利用者（高校生）が決めること。
文字通訳にはタイピングスピードや正確性など技術の向上を期待する。
情報支援があれば、それでいい！というのは大きな間違い。
一番大切なことは、ろう者を理解すること。

目標は『ろう児が聴児と同様に力を発揮でき、その力が正しく評価される社会』